2014 ELLE シネマ大賞 ノミネート

2014 カンヌ国際映画祭 正式出品作品

2014 ビエンヌフランス映画祭 ヤングジュリー賞

2014 ディアーヌ&リュシアン・バリエール 財団賞

2015 セザール賞有望男優賞ノミネート アハメッド・ドゥラメ

2015 サンタバーバラ国際映画祭 観客賞

2015 トロントユダヤ映画祭 最優秀作品賞（女性監督部門）

2015 セントルイス国際映画祭 最優秀作品賞

2015 コルコア フランス映画祭 特別観客賞

2015 ニュルンベルク国際人権映画祭 Open Eyes Jury Awardノミネート

2016 ボストン・ユダヤ映画祭 観客賞

2016 ワシントン・ユダヤ映画祭 観客賞・最優秀作品賞

一人の教師のアウシュビッツに関する"ある授業"が、
落ちこぼれたちの人生を変える——。

8/6(土) ロードショー

文部科学省選定 一般劇映画
（少年・青年・成人・家庭向き）

奇跡の教室
受け継ぐ者たちへ

Once in A Lifetime

監督：マリー＝カスティーユ・マンシオン＝シャール　脚本：アハメッド・ドゥラメ、マリー＝カスティーユ・マンシオン＝シャール　出演：アリアンヌ・アスカリッド、アハメッド・ドゥラメ、ノエミ・メルラン

提供：シンカ、NHKエンタープライズ　配給：シンカ SYNCA　宣伝：ブリッジヘッド、ブレイントラスト　後援：ユニフランス／在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

©2014 LOMA NASHA FILMS - VENDREDI FILM - TF1 DROITS AUDIOVISUELS - UGC IMAGES - FRANCE 2 CIN E MA - ORANGE STUDIO

kisekinokyoshitsu.jp

日本、世界中が泣いた!
ています!!!

1人の女性教師の導きで、多民族の落ちこぼれクラスが、
差別にまみれたアウシュヴィッツというテーマに正対する。
社会や大人に見放された子どもたちが、
教師の信頼を得て劇的に変化していくさまは圧巻であり魂を揺さぶられる。
躍動する教育の真髄がここにある。

尾木直樹(尾木ママ)さん
(教育評論家、法政大学教職課程センター長・教授)

これが生徒たちなのか、そして教師なのか。
生徒たちの表情がキラキラ煌めいてきて、それが奇跡の片鱗だとわかり、
それを教師が1つに導いて奇跡を起こそうとしていることに気づいた。
そのときには僕のハートは涙で裂けていた。

志茂田景樹さん(作家・よい子に読み聞かせ隊 隊長)

夜間定時制高校で、生徒たちと共に生きた日々を思い出しました。
教育、すばらしい営みです。教師と生徒の心が一つになったとき、
思いもかけないような輝きが産まれます。
子どもたち、君の学校でアンヌ先生を探してごらん。きっと見つかります。

水谷修さん(夜回り先生)

落ちこぼれの生徒にアウシュヴィッツを教えるこの映画を、
全世界の人達がみて戦争の悲惨を悟るべきです。

海老名香葉子さん(文筆業)

パリ郊外の高校の困難な現実と教育の希望がある。
サクセスストーリーだが入り組んだ物語。
「すべての絵には描かれた意図がある」。
中世の絵を説明するゲゲン先生の言葉を生徒たちは応用する。
私たちもこの映画の意図は何かと問うべきだろう。

伊達聖伸さん(上智大学外国語学部フランス語学科 准教授)

人と人との相互作用のスゴさを実感した。
落ちこぼれの生徒たちが悲惨な歴史と正面から向き合うことで、
自らの生きる意義を見出していく。一人の教師が、生徒を変えたのである。
そして、その生徒たちによって教師もまた成長していく、
それをこの映画は私たちに教えくれるはずだ。
若者だけでなく、すべての教師にぜひとも見てほしいと思う。

河合敦さん(多摩大学客員教授、歴史研究家)

「思春期」その嵐のような時期に
どんな大人に出会い導かれるかで人生は決まる。
肌の色、思想、宗教の違いが大きい国の、しかも思春期。
本気の情熱でそのエネルギーを人間力に導く教師
アンヌ・ゲゲンの美しい魂に慟哭が止まらない!

小林照子さん(メイクアップ・アーティスト)

いやはや、アンヌ先生のちいちゃな身体のどこから
このとてつもない情熱が生まれるのだろう。
ポンコツの生徒たちに対する愛情、熱意の条件反射!!
『退屈な授業はしないつもり』この呪文にかかった　あなたたち。
やればできるじゃない!やったじゃない!!
みんなの成長していくサマがすこぶる気持ちいー♡

萬田久子さん(女優)

教える難しさ、学ぶ難しさ、教える嬉しさ、
学ぶ楽しさ、そして自分で考える大切さ、
それを、今一度、教えて貰えました。

小堺一機さん

アウシュビッツ強制収容所のことは
高校時代の68年に見たアメリカ映画で初めて知ったが、
こんなに一所懸命に世界史を教えてくれる先生は、
当時、僕の学校にはいなかった。
今の日本にこんなに過去と未来に厳しい先生は、いるだろうか。

井筒和幸さん(映画監督)

生きている歴史、いま私たちがいる現実の社会、それらを学ぶということ。
教育の本来あるべき姿がぎゅっと詰まった映画でした。

佐々木俊尚さん(作家・ジャーナリスト)

学校は子供たちに知らしめ、考えさせ気づかせる場所。
身体より心の成長はとてもゆっくりだから、子供の可能性を
信じ見守ることが大人の役目。

山本浩未さん(ヘア&メークアップアーチスト)

文化、民族、宗教の異なる人々の「共生」。
その至難を背負わされたパリ郊外の高校が舞台。
人種差別、格差と貧困、暴力。
現代フランスの抱える諸問題が構造化された日常の重みに、
押し潰されもがく生徒たちが、ホロコーストの地獄を生きた人々の記憶と
向き合うことで、自己の尊厳と他者へのいたわりを取り戻していく。
ともすると諦めに飲み込まれてしまいそうな現在にあって、
人のポジティブな可能性をもう一度信じてみたくなる。

高橋暁生さん(上智大学外国語学部准教授)

のストーリー

(順不同)